

ウィリアム・アーヴィン著

## ウォルター・バジ ョット (4)

訳 渡 辺 弘  
立 川 順 子

### 第 三 章 実業とロマンス

1852年に弁護士の資格を得ていたが、バジ ョットは職業としての法律は即座に断念し、父親について銀行業務を学ぶために、ハーズ・ヒルに身を落ちつけた。この決定は恐らく幾たびも熟考した結果であったのだろう。快活で生き生きとした精神の持ち主にとっては、幾分、無味乾燥で抽象的すぎる法律の勉強は、全く彼の気質にそぐわなかった。彼の健康状態は最善とは言い難く、母親は彼が家にいることを望んだ。ついに彼は以前から関心を抱いていた文化的、科学的研究を追求するには、銀行業務がより多くの余暇を与えてくれるであろうと心に決めた。バリントン夫人がわれわれに次のように伝えている——

彼は『プロスペクティブ・レビュー』誌に発表した『通貨論』と『ジョン・ステュアート・ミル論』という論文によって著述業というはしごにすでに足場を築いていた。「クーデター」についての書簡で彼は大胆にも前面に跳び出し、ユニテリアンのサークルの人々の期待をたった一度だけ裏切りました。そしてパリからロンドンに戻るやいなや、法律業務は文学とは相入れないものであると、これまでに以上に気づきました。もっとも文学を自他共に認める職業とすることは一瞬たりとも考えたことはなかったのです<sup>31)</sup>。

バリントン夫人の最後の言葉、すなわちバジ ョットは文学を職業とすることは一度も考えたことがなかったという点は重要である。彼の生涯の特異な環境、一家の伝統、彼の精神と気質の生来の傾向が、職業作家という静かな生き方を彼にとって魅力のないものにした。彼は行動することの躍動感、すぐに触知で

きる現実に係っているという感覚が必要な人間であった。手がたい商人の息子である彼は「世間において支柱となるもの、社会的地位は、……イギリスでは安樂のために必要不可欠である」<sup>2)</sup>と感じていたことが、友人であるハットンに宛た手紙が示している。さらに、バリントン夫人の言葉によれば、彼は自分の精神の上を絶えず襲っていた苦悩に対する麻酔剤を恐らく必要としていたのであろう。静かで余暇の多い生活を選んでいたら、あれこれ思い悩むことを招来したであろうが、没頭させる日常の業務の繰り返しは、ある種の逃避を提供した。

しかしバジョットが法律家としての生活よりも、銀行家としての人生を選択したということには、もっと深い理由と幅広い基盤があるというのが私の考えだ。思考の分野においては、全ての問題について殆ど本能的に人道主義的態度をとったように、人生においては、ある一つの活動に自らを限定するのではなくて、バジョットが今日知られているところのあの多才さと人間的な経験の幅を発達させるような職業に自然と引きつけられた。この動機がいかに意識的であったかを述べるのは不可能であるが、私が指摘したのと同じ理由で、銀行家としての人生は現代文明において恐らく最高に幸福で豊かなものであると、後年の著作の中で彼がしばしば語っているのは意味深いことである。

彼の実業界における経歴の初期の数年間、充実して刺激に満ちたものであった。彼の日々は昼間は会計課で、夜は研究に費やされ、複式簿記のいかめしい厳肅さは、シェリーやハートリー・コールリッジについての楽しい道楽と交替した。たび重なる不健康と頻発する母親の精神錯乱にもかかわらず、彼は尽きることのない気力でもって両方の仕事に取り組んだ。何故なら彼は精神状態が気まぐれな運命に依存している類の人間ではなかったからである。友人であるエドワード・フライ卿に彼は次のように書き送っている――

もっかはかなりひどい頭痛に悩まされていますが、概して私の健康状態は良好です。しかし私は自分がこの世で最も幸福な人間であると確信しています。いかなる不幸も長くは邪魔することが出来ないし、まして尽きさせることも出来ないと思じる、あふれるばかりの活力が私にはあります。明白な理由もなく、或る人々には生まれつきの

憂うつに関しては、それが何を意味しているのか私には分かりません。未来全般に関して私は希望に燃えているわけではありませんが、希望の助けなしにうまくやってゆけるだけのある種の向こうみずな陽気さがあります<sup>2)</sup>。

バジョットが銀行の会計課に入ったことは、再び父親と毎日、接触させることとなった。そしてその結びつきは温和な老紳士に幸福と同程度の悲しみをも引き起こしたに違いない。何故ならウォルターは本質的には聡明で信頼に足る人間であったが、銀行業務の宗教的側面については全く気づいていなかったからである。彼の父親は宗教的信念においては素朴な気どりのないユニテリアンではあったものの、ビジネスにより形式主義的信条の精密な司祭主義的な点を授けた。ビジネスは彼の金の仔牛（イスラエル人の崇拜した偶像：訳註）であった。彼は自らの偶像崇拜に対して何か途方もない見返りを期待していたというわけではなかった。家族を養うためのほどほどの生計が彼の望んだ全てであった。実を言うと、トマス・バジョットは生来、偶像崇拜者と隠者の奇妙な混こうであった。偶像主義をまさに表徴するものは儀式であって、その儀式に対して彼は謙虚で憤しき深い好感を抱いていたように思われる。彼の息子はまだ大変幼いときに手紙の中で、ロバート・ピール卿のことを准男爵閣下 (the right Hon. Baronet) とかなり念を入れて言及している。彼は父親の癖を模倣しているのではないかと思う人がいるだろう。しかし儀式を愛したこと以上に年長のバジョットは自制と自己犠牲の精神の練磨、肉体と精神の苦行を熱望した。彼自らが信ずる宗教はそのような無謀な行動を否定した。むち打ちはカトリックのものであり、それゆえ忌むべきものであった。ビジネス以外に頼るものが彼にあったであろうか。ビジネスに方向転換し、全く疑うこともなく、それを祭壇に据えた。それは厳粛で苛酷な義務の源となり、節制を要する儀式だった献身の対象となった。ビジネスの名の下に彼は自らの生活を禁欲的几張面さと敬虔な厳格さをもった儀式に変えた。彼の出勤時間は常は一定であった。簿記をつけるときは、微細な点に至るまで正確であった。彼は実直にも、業務を遂行するときの昔からの複雑な型の全てに忠実であり、そのようにしても全く安全であると思われるときですから、手っ取り早い方法を少しも使わなかった。壮烈、苛酷

なほど労働に心血を注ぎ、自らに余暇を殆ど許可しなかったので、徹底的に病氣とつきあうようになった。というのは、病が快方に向っている間、苦痛が去ったときは主要な楽しみであった知的、文学的探求に没頭することが出来たからである。恐らく不幸なことに病氣は少なく、何年にも渡る敬虔な気持で行う日常の型にはまった仕事の方は多すぎたのであろう。彼がどの程度まで奇妙な熱狂ぶりを押し進めたか、それによって彼の精神の範囲をいかに制限したかは、息子の死後、自らの死期も近づいた頃に述べた次のような言葉の中に哀れにも明白にみてとれる——「私がウォルターよりも長生きしなかったら、彼がいかに偉大な人間であるかは知りえなかったであろう」<sup>9)</sup>。

恐らくウォルター自身は27才のとき、自分は十分に真価を認められていないと感じていたのであろう。いずれにせよ、内なる安らいの場所における彼の態度は、快活で気楽なものであった。彼は不必要な詳細な点を修得することのどてつもない精神的重要性を見落とした。正確さという神聖な法に違反し、帳簿のつけ方がまずくても明朗であった。

#### 親愛なるハットン

ここ4ヶ月というもの、殆どもっぱら複式簿記の技術の修得に私の時間を費してきました。その理論面は納得出来るものであり、面白いのですが、実際面となると恐らく何にもましてすまじいものでしょう。私は算術というものは見解の問題であると主張しているのですが、これもまた無駄なようで、ここで私の管理下にある人々は偶然的な問題の性質を理解しようとせず、数字計算はたった一つの結果を生じるものであると証明しようとしています。けれども私の場合はその計算が違って出て来るので、それは間違っていると思います。しかし無教養な人間の直観的独断に感化を及ぼすことは無理です。別の点では私は商人の生活に満足しています。簿記の問題さえ私の神経をすり減らさなければ、この生活には何か刺激があります。義務は常にわずかで、疲労をもたらす労働は全くなく、いまやそれは完成の域に達しようとしています。

そして再び彼は友人のウェイトに次のような不平を述べている——

私はいま父の銀行の会計課で帳簿つけをして（やりそこなって）いますが、商人の生活のしきたりに違反する恐しい罪のかどで一日に99回、叱られています。多分、君

もご承知のように、私の一族はこの地やその他の所で、商人、船主、銀行家などなどをつとめています。彼らの種々雑多な職業の中から、私にも不適當ではない職業を何か見つけ出すことが出来たらと願っています。（まだ見い出せたとは厳密には申せません）

何事も『立派に』成すべきであるという君のお考えに関しては私がその考える捨て去ってから長くなりますので、今や全くそのように考えることは出来ません。私が現在、難儀している事は、『いやしくも』何かを成し遂げることです。私がこれまでに知りえた唯一のことは『特別事実の訴答』だけで、私が修得した途端に法律の改革者たちはそれを台なしにして廃止してしまいました。それは大変面白味のある技術で論理的能力が特に役立つように思われる唯一の職業であったために、人生におけるシャンペンのようなものであったのですが、法律をご存知でないこの人々は愚かにもそれを廃止してしまったのです<sup>4)</sup>。

ウェイトは高遠な大望に満ちた手紙を書いていたようであるが、バジョット独自のかかなり皮肉っぽい謙虚さの中にかすかな非難の調子が典型的に見られる。父親の信条に逆らうことに彼がどれほど愉快さを感じていたかが窮えて興味深い。父親が正確さにおいてそうであったのとほぼ同じ位にバジョットはぞんざいさに心を傾けていたように思われる。情け深い老人の感受性は快よく（そして明らかに害を与えることなく）犠牲にされ、真面目で落ち着いた少年時代は子供じみた頑迷な青年時代によって復讐を受けた。

バジョットは肩のこらない娯楽にふけたことは一度もなかった。人生の真剣なビジネスは充分に気晴らしとなった。戸外の空気と運動を求めて、一人で狩猟を楽しんだ。

彼は威勢のいい騎手であった。そしてすがすがしい風が彼の初期の文芸上の努力に吹き抜けてゆくのが感じられた。それはあたかも馬上でものを考えているようであり、主として明晰な観察者の落ちついた分析がみられる彼の後年の評論には欠けている効果であった。しかし若い人々の楽しむ通常の娯楽の多くを彼は嫌った。球戯というのは大そう馬鹿げたものであるのも、また青やピンクの洋服を着た娘たちは互にとてもよく似通っているのも『邪悪なもの』であると考えることが出来ればよいのとよく言っていたものだった。それは多分、一つには彼の極度の近視からくる感想であったのだろう<sup>5)</sup>。

バジョットの文芸、伝記および宗教に関する評論の大部分は、1852年から58年の間、すなわち彼が実業の世界に足を踏み入れたときから、結婚した年の間に書かれていた。それらは『プロスペクティブ・レビュー』誌に、後には『ナショナル・レビュー』誌に発表され、彼はその雑誌の経営に密接に係わっていた。それらの評論の成功は1858年の新聞の切り抜きが示しており、バリントン夫人は次のように引用している——

数年前『進歩的ソシヌス教徒』であるティラー、マルティノウ両師が聖ベルナルドの『見よ、大望を抱け、富み栄えよ』という人目を引くモットーを掲げて『プロスペクティブ・レビュー』誌を創刊しました。そのどこか偏狭で党派性の強い色調のせいで『プロスペクティブ・レビュー』誌は栄えなかったで、よりよき未来を願ってその経営者はその雑誌を『ナショナル・レビュー』誌として再び洗礼を授けることとしました。ここ12ヶ月の間、明らかに同一の筆者のペンによる批判精神と個性あふれる一連の論文が人々のかなりの関心を『ナショナル・レビュー』誌の静かなページに引きつけてきました<sup>6)</sup>。

「これらの論文はバジョットの手によるものでした。」とバリントン夫人は付け加えている。1858年、バジョットは彼の初期の評論のうちで『最も注目すべきもの』を集めて、『イングランド人とスコットランド人の評価』(*Estimates of some Englishmen and Scotchmen*) と呼ばれる書物にして出版した。大衆がそれに与えた評価に関してハットンが次のように書いている——「バジョットの初期の評論を集めたこの書物がかなりの失敗作であったということは、私には理解出来ないことだった。たとえそれが失敗作であるということを私が否定しなくても、それが当時の最も教養ある物書き達の注目を大いに集めたものであった」<sup>7)</sup>。しかしそのような注目をバジョットはありがたく受け取めた。それらの評論が世に出たとき、彼は恋愛中で、文芸上の評価という取るに足らない結末には関心がなかった。このようなことにもかかわらず、彼はエリザ・ウィルソン宛の手紙の中で次のように書いている——

私は心が無感覚で恐らく高慢なのでしょう、単なる一般の名声など気にかけてはい

ません。勿論、そのようなものに与れば喜ばしいことでしょうが、分別ある人間ならそれを自らの幸福のために必要としたりしないでしょ うし、万一その名声が彼のものとなっても、ただ単なるかりそめの贅沢としか考えないでしょう。超一流の名声、つまり偉大な作品を産み出す芸術家の名声は全く疑問の余地のないものですが、それ以外の名声は全て疑わしいものです。つまり人々は後世のことなど思い及ばないものですし、今はそのような人々が多過ぎます。名声はただちに獲得されねばならず、瞬間瞬間の作り出す状況は偶然の問題にすぎません。私の場合はこれらの評論が初めて世間に公になったとき、少くともそのうちのいくつかはかなりの新聞の称賛を受けましたし、これ以上は期待すべきではないでしょう。そのうえ、私はそれらが将来、悪しざまに言われるであろうということ、また誰によってそうされるかも分っています。そしてもし不注意に新聞の好意的でない批判を無視するなら、好意的批評を尊重する権利もないということも承知しています。しかし私はある種の名声は心から望んでいます。その証拠に『ナショナル・レビュー』誌を通してマシュー・アーノルドの反応がみられる手紙をあなたに送ります<sup>8)</sup>。

アーノルドの手紙の中のそれに関連する一節は以下のようなものである――

私が先月号でシュリーについての論文を読んだのは、ほんの一兩日前のことであった。その論文とその他一、二の論文は、(同一筆者によるものと私は想像しているが) 私には第一級の内容をもつものであるように思われる。それらは単に才能のみならず、英文学において稀有ともいえる「飾らない真実」への関心を示している<sup>9)</sup>。

この章はバジ ョットの作家としての名声を論ずるべきところではないが、彼の文芸および伝記に関する評論は、それにふさわしい注目を浴びなかったという ことに関して、私はハットンと同意見であることを表明せざるをえない。バジ ョットが亡くなったとき、世界中の新聞は彼の経済学とジャーナリズムに対する貢献を大いに論じたが、彼の文芸批評に関しては殆ど何も言及しなかった<sup>10)</sup>。とは言え、新聞は書簡に関心を示さず、ようやく 1915年になって J. M. ケインズ氏 (Keynes) のような優れた思想家が、バジ ョットの文芸批評は『彼の名声には及ばず』、『シェークスピア、ミルトン、ギボンについてのほんの皮相的な解釈』を提供したにすぎないと言明したことは認めねばならないことであるが<sup>11)</sup>。一方、バジ ョットは後年の批評家の間で二、三の純然たる称賛者をもつ

ており、その中ではオーグスティン・ビレル (Augustine Birrell) と故アーヴィング・バビット (Irving Babbitt) が最も著名である。彼の名は一般読者には殆ど知られていないが、19世紀の文学と政治に関する眼識ある著述家の伝記の中に登場しないことはめったにない。彼は両方の分野でどこか批評家の批評家めいたところがあるが、たとえ彼の一般的名声が高くなくても、別の分野の能力があるからといって専門家はその同僚を寛大な目で見たりしないものだということのをわれわれは記憶せねばならない。

銀行業務におけるバジョットの種々の活動は、当然、当時の経済上の様々な問題に対する彼の関心を大いに駆き立てた。1856年、彼の友人のハットンが当時、自由党政府の大蔵大臣であったジェームス・ウィルソン (James Wilson) が社主をつとめる金融誌、『エコノミスト』(The Economist) の編集者となった。ハットンがこの雑誌と係わりをもったことは、バジョットに寄稿するというアイデアを思いつかせた。彼はウィルソン氏に連絡を取り、氏はクラヴァートンの田舎家に招待する旨、返事した。バジョットがその政治家の娘で後に結婚することとなったエリザ・ウィルソン嬢に会ったのは、この訪問のときであった。近年、バリントン夫人によって公表された二人の間に交わされた愛の書簡は、他のどの著作にもましてバジョットの人となりを詳細に浮き彫りにしている。

もし屈強の男たちが若々しさに満ちあふれたラブ・レターを読み、赤面し、もの思いのため息をつかないとしたら、たった一つではなく、幾通もの書簡を読む伝記研究者は何を心の支えとしたらよいのであろうか。そのような書簡に時代の痕跡、すなわち色あせたインク、黄変した用紙、極度に重苦しい特徴もないとしたら。今日ではむしろその特徴となるのは、その書簡が互に似通っていること、その画一性である。若い人々にとって全ては大そう目新しく、驚異に映るものである。彼らは感嘆符の頂点に住んでいるのである。しかしながら分け隔てられた愛の物語は常に変わることがない。全ての往復書簡には、お互の愛に対する共通の驚き、独占することの共通の歓喜、嫉妬心を駆きたてたいという共通の欲望、無価値であることの共通の甘美な感覚、未来についての共通の輝やかしい夢、そして大部分の上品な恋愛事件の場合と同様に、結論が結婚



であるときには、同じ平凡な未来の押し寄せる音——つまりティー・スプーンや食器類がいつそうがちゃがちゃいう音が存在する。そのような往復書簡を読むことは、永遠の春という単調さの中に住むこと、いくつにも変装してキューピッドが凝視しているのを眺めるようなものである。現在は礼儀作法というエプロンのひもに結びつけられているようにみえるが、彼は時には目を見張るほど奮闘することもある。情熱的でなおかつ純粋なロマンスというものは殆ど存在したためしなかった。『高潔なロマンス』で人の興味を駆き立てるものは少ない。

クラヴァートンに到着した当日の晩に、バジヨットは不思議にもウィルソン嬢と夕食のテーブルに同席するという幸運を得た。独身主義者で『可愛いブルーやピンクの服を身につけた娘たち』に対する嫌悪のせいで、若い女性全般に偏見を抱いていた彼が、たちまち大いに心を奪われた。彼女はその当時の華麗な上流階級という環境のまさに一部のように思われた。彼女は「私にとって言葉で表現出来ないほど魅力的にみえる、あるはにかみを含んだ威厳」をもっていたと彼は後に告白している。彼が腕を差し出したとき、彼女はまるでこう言っているかのような仕草でそれを受け入れた——「まあ、それに触れなくてはならないけれど、大そう触れるようなことはないようにしましょう」と。そして彼女がクラヴァートンの医師に話しかけたとき、彼は彼女の顔に『奥深い威厳のある表情』が浮かんだのに気づいた。それは「あなたがいらっしゃるので、少しの間、我慢して一緒にいなくてはなりません」ということを意味していた。しかし彼女はバジヨットをそのように見ていたのではなかった。実際のところは、彼がエリザの妹たちに言った二、三の気のきいた事柄に対して彼女が微笑んだということであった。彼は『教則本』を知らなかったので、彼女には殆ど話しかけなかった。従って最初の出会いは好調のうちに進み、以後、彼の求愛の進展はヴィクトリア朝的スピードの観念によれば、急速であった。都会においても田舎においても、彼は何とかしてウィルソン嬢に会おうと努めたが、特にクラヴァートンでの秋の季節の間はなおのことであった。それから実際の求婚が開始された。「月光のもとでテラスを散歩したり、『二人だけで』

お気に入りの詩を読んだり、草原でのピクニック、「絵画陳列室でのバトミントンのときは、ウォルターのあの特徴ある単眼鏡は」、彼が羽根のあとを追ってあちらこちらに走り回るとき、その黒いひもに乗って空中を漂った。温室での陰うつな逢瀬もあった。バジョットは母親の異常について話さねばならないと感じた。しばらくしてウィルソン氏に求婚の許可を求めて承諾を得たのち、図書室で自らの運命と立ち向かった。しかしまたしても悲劇がひそんでいることを不吉にも暗示するものがあった。バジョット夫人の状態について知っても、それはエリザの気持に変化をきたさなかったが、「未来の展望を幾分、複雑なものにし、性急に物事を決断する傾向はもたなかったのも、その場で明確な態度をとることにためらいを見せた」。2、3日後に、ロンドンで彼女は同意し、バジョットはハットンに伝えるために出発した。

彼の最初のラブ・レターは、イギリス南西部からのものであった。その地には金融パニックがあって、彼は銀行の権益を監視するためにサマセットに出かけていた。彼はその恐慌には大して関心がなかったが、エリザがエディンバラへ発つ前に会えるかもしれないということには大いに関心があった。彼女はそこでスコットランド人の有名な内科医に頭痛を治療してもらうことになっていたのである。彼は彼女に会ってもっと話をしなくてはならない、『詳しいこと』を知らなくてはならなかった。さもないければ、彼女の実はその肉体の存在とともに消えうせ、彼の幸福は信じ難い夢と映るであろう。落ち着かない気持で彼はちょっとした機知を試みたが、ただちに謝罪した。彼女は彼のことを無礼な人間とは考えていなかったに違いない。「私が冗談にくだらなことを書いているからといって、陽気な気分ではないと思わないで下さい。私の心の奥底を読みとって下さるようお願いします。もしあなたがここにいらっしゃるのなら、あなたへの私の想いがどれほど『猛烈で』あるかをささやきたいところですが、手紙ではそうもゆきませんし、あまりにどぎついことになるでしょう」。彼女は彼の冗談を全く気にしていないと返事した。彼はあるがままの自分自身を恐れていなかったに相違ない。彼女は彼の感情の激烈さに少し驚きを覚えた。彼女自身に関しては、全く快活で、「5分間と暗い気持で過ごしたことはなかつ

た。彼女は手紙でもって彼を慰めようとした。というのは、『慰めること』は彼に対する彼女の使命であるべきだということに両者は共に同意見であったからである。彼は時折、感じる『手に負えない、身を焦がすような苦痛』のことを彼女に話したからといって、彼女に対する愛が『単なる苦しみ』であったと考えないように抗議した。「最悪のときにも、どうしても私には逃れられない激しい狂気じみた心の高ぶりがその愛にはありました」。しかし今や彼の感情は以前よりももっと耐え忍ぶことの出来るものであった。時々、彼はこうつぶやきながら歩き回った——「『私はあの威厳ある女性をのびきらない破目に置いてしまった、そうなのだ、そうなのだ』。それから有頂天になってソファを飛び越えました。以上のようなことがあなたが掛かり合いになってしまった人間の感情です。私の駄弁にどうかご立腹しないで下さい。横柄さは私のもって生まれた気質です。私は尊敬する人全てに常に無礼な態度をとってしまうのです」。彼女は彼のお気に入りの言葉のいくつかを使って、母親のように金融上の気苦労がひき起こす緊張を狩猟で解きほぐすことを勧め、ブリストルの近郊のどこで良い馬が借りられるかを教えた。時折、警告の影が心をよぎったものの、彼女は自分が彼に忠告しうる事柄に驚いた。

ウォルターはエディンバラにおける彼女の生活の退屈さを知って愕然とした。退屈さ以上に悪いものはない。「ピアノによってのみ救われる生活とはいかなるものであるか」。人々は『エコノミスト』誌に掲載された彼の論文に称賛の言葉を送っていた。彼は喜ばしいと思ったが、名声は彼の最大の誘惑物ではなかった。

自己の価値を評価されたいという願望は、実際の価値以上に評価されたいという願望が悪徳的であるのとほぼ同様に人格上の美德にとって重要であります。私自身はあまりそのような傾向はありません。『権力』が過度に人々の意志や能力、行動に対して影響を及ぼすことを私は切望しているのではないかと思います。私はこのこと（権力志向：訳註）は、多くの点で良いことでもあると思いますが、私がそれに対して感じている強さを全く是認するわけにはゆきません。あなたを知るまでそれは確かにこれまで私が知っていた最も強い感情でした。今は確かにそうではありませんが、私の幸福や価値にとっては善以上に強いものです<sup>13)</sup>。

そのような新事実はかなり驚愕のである。何故ならその本質は人の著述活動の性格の中にただちに現われるものではないし、それを伝記作者達によってパジャットに帰するわけにもいかないからである。しかしながら、ひとたび告白されると、それは多くのことを説明してくれるように思われる。彼の最良の友の選び方、つまり穩健、丁重でお追従使いのハットンを親友に選んだこと、知人たちに社会的実験を甘んじ受けさせようとする彼の癖、冥想的生活よりも活動的生活を好んだ点、公的な経歴（代議士：訳註）に進出しようと何度も試みたこと——恐らく、ルイ・ナポレオン皇帝を熱烈に弁護したことや、彼の最も有効で痛烈な著作における強力な芸術的風格の要素も——これら全ては権力を行使することの上品で、変らぬ醍醐味、時には喜悦を暗示している。この傾向は彼が妻を選ぶ際にも同様に見うけられる。というのは両者の愛が深まり、共により率直になるにつれて、エリザは彼女の書簡全てに明瞭に表われていることを告白しているからである——「私は自分の本当の性質は大変女らしいと信じています。つまり私の言いたいのは、表面上はいくらか自立しているようにみえるかもしれませんが、もっと力強い性質の人に依存したいということなのです。もしそうしなくてはならないのなら、私は自立することはできますが、そうしなくてはならないと考えるとだけで気が重くなります」。彼女の態度には人目を引く威厳があったが、性質は柔軟で感化されやすかった。彼女の精神はひどく奇抜なところもなく、明らかに理解が速く、感受性が強かった。勇敢で包容力のある紳士にこれ以上ふさわしい女性がいるであろうか。彼の目から見て、彼女は美貌と同時に堂々とした威厳と高い社会的地位に釣り合う、あの近づき難い魅力をもっていた。さらに、彼女のえり肩はやさしかった。彼女は崇拜に対して従順さで報いる女神であった。彼女の中の貴婦人的なところがあがめられ、女性らしさが尊敬を集めた。

次第にエリザは彼女の愛の重大さ全体に目ざめていった。彼女は若い頃、一度恋をしたことがあった。それは淡い恋で「彼女の感情をかき集め、通り過ぎていった」。それは屈辱的な体験であった。「私はもし結婚するなら、その結婚すべき『人』以外は誰も好きにならず、もし結婚しないのなら、『誰も』好き

にならない位の純粋な精神でいたいという願望と意志で（間違いが生じて、私は自分の弱さを知らねばなりませんでした）人生をスタートしました」。彼女はウォルターに出会う以前からずっと人に踏み入れられたことのない心の奥底、「これまで休止状態にあったが、もしそれが運命づけられていて、その心の奥底を所有することの出来る人に出会ふといけないので、あえてそれを詳しく語るのは控えたと思う、愛情の深さ」に気づいていた。今、彼女はその人と出会って深く感謝していた。その経験は彼女が想像していたよりもさらに重要であった。

私たちのような愛情は『類稀であって』、人生に新たな意味を与えます——少なくとも私にはそうです。それは私が想像していた単なるエピソードではなくて、人生における強力な力であるように思われます。限りなく激しい場合を除いて、その感情が私の想像していたものとは異っているとは言いかねますが、人生に与えるその影響、そのさいはての地平線にまで与える影響は『驚くほど』強いように思われます。私は時間と永遠の時を通して、私たちの存在が私の想像し得なかったように結びつけられるのを感じます。このように慎しみなくあなたにお手紙を書けることは私にとって大いなる慰めですし、私はあなたのお望みのようにすぐにあなたのお名前にも慣れつつあります。しっかりとあなたのお手紙を握りしめ、最上級の形容詞でその上につぶやいています<sup>15)</sup>。

驚きと大いなる感謝をこめて、ウォルターは次のような返事を書き送った。

私もまた『私の』魂とあなたの魂が『永遠に』結びつけられているのを長い間、感じてきました。しかしそのことがあなたを動転させ、私のことを誇張癖があるとか、取り乱しているとお受け取りにならないように、申し上げるのを差し控えるべきでしたが、クラヴァートンの図書室であなたが私の肩にもたれかかった時からずっと、私は自分自身が言葉に言い表わせないほどあなたに結びつけられてきたのが分かりました。この世にあって来世においても私はあなたのものであるという思いが私の心をよぎりました。それ以前にも私は激しい熱烈な情熱とある種の深い感動を感じましたが、今、あなたに対する私の愛に漂っているような神聖、清澄で永遠的なものは何もありませんでした。「我が魂は汝を愛する、我は何を語るべきや」という詩句が聖書の中になかったでしょうか。それはどこかの章の端にあって、私の言わんとすることと、それを言葉にすることの困難さをも表現しています。あなたが今、私に対して私自身が感じているのと同じ強い永遠の絆のようなものをいやしくも感じていらっし

ゃるとは夢想だにし得ませんでした。あなたがそうお感じになっているということを認めることが出来ないほど、世俗的で冗談好きなところが私にはあるということが気がかりでもありましたが、あなたがそう感じられる『気がする』とお聞きして『身にあまる』光栄——光栄というにはあまりに畏れ多くてかたじけないほどです。あなたの深く変らぬ気質とその意味するものを私は心得えています。このようにあなたにお手紙を差し上げたり、びっくりさせてお気を悪くならなければよいのですが。言葉が不適當かもしれませんが、私はあなたの感情を害するつもりは全くないのです。あなたから届いたばかりのお手紙を眺めて、私がいくたび目に「涙」したことか、そしていくたびそれに口づけしたかを（多分、無礼なことでしょうが）あなたにお話しなければならなかったら、あなたは私のことを最も『愚かな』人間とお思いになるのではないかと思います。私がいかに堅物で禁欲的な人間であって、そのようなこと全てに全く無関心であると世間一般で思われているかをお知りになったら、あなたは私に懇願したりなさらないでしょう<sup>15)</sup>。

そして奇妙なことに、彼女は驚愕しなかった。愛が彼女を大胆にし、ヴィクトリア朝の因襲という恐ろしい怪物は、女性の優しい手で殺害されるか、もしくは少なくともひどい傷を負わされた。

あなたのお好きなことをお書きになることを恐れてはなりません。〔彼女は返信している〕私はあなたがこれまでおっしゃった全てのことに耐えられます。何故ならあなたはいくらか私の心に変革を起こしているからです。そしてあなたのおっしゃることが深まれば深まるほど、あなたへの私の感情はますます現実的になるように思われます。『今』私の手紙に口づけることは何故、『無礼』なのでしょう。私も同じことをしたことがあるとお聞きになりたいですか。もしそうでしたら、白状しましょう。もし違うのであれば、私が前言を取り消したと想像して下さい<sup>15)</sup>。

別の手紙の中でエリザは結婚して20年になり、スコットランド人の医者によって奇跡的にも元気を回復させられ、頭痛を治療してもらったキネヤード夫人(Lady Kinnaird)の方が自分よりもずっと美人であると全く無邪気に書いている。ウォルターは怒りで我を忘れた。「結婚して20年になるK夫人か誰かがあなたと同じ位、美人であるなんて全く馬鹿げています。愛する人よ——全くくだらないことだ——私は美に対してきわめて厳格な鑑識眼をもっています。私

はいかなる人もそう簡単に美人とは言わない人間として知られています。私の言うことを信じて自分自身の美しさについて愚かな考えを抱かないほうがいいと思います」。しかし彼女は自分の主張を通し、ウォルターが痛烈なやり方で別の女性を批判したとき、彼女は次のような返事をしたためている――

あなたは女性についていくらか批判的になりすぎているのではないのでしょうか。彼女たちは愚かであってはなりません。彼女たちはおしゃべりをしてはいけないし、黙っていてもいけません。その他どうあろうと、彼女たちは美しくあらねばならないのです。私は自分があなたのお眼鏡にかなうように全てにおいて素晴らしき『中庸』であらねばならないと思い始めるでしょう。そして私は我れ知らず中味のない人間になってゆくでしょう<sup>6)</sup>。

エリザは自分が彼にふさわしいほど頭がよくないという恐れを繰り返し表明している。彼は自分が彼女の考えているよりもはるかに頭の鈍い人間であることを恐れた。彼女は『ナショナル・レビュー』誌に掲載された、彼の才能に関するハットンの評価を読んで、大いに驚かされた。彼は非常に喜び、彼女が自分よりもっと『多くの教養』と『より奥深い気質』の両方をもっていることを慌てて納得させた。

このような彼らの文通の進んだ段階においても、ウォルターは相手の感情をそこなうのではないかという恐れに苦しめられ、つきまとわれた。

私は苦もなくあなたにお手紙を書いています、それが私の手元を離れた瞬間、あなたのお気にさわることを言ったのではないかと不安になります。そしてあなたがお読みになるとき、そばにいられないのがとても口惜しい気がします。それを説明し、あなたからいらだたしさのかすかな影でも晴らすことが出来るように<sup>16)</sup>。

次第に彼はもっと確信を抱くようになり、自分が実際に彼女と『おしゃべり』出来ることをとうとう発見した。彼は大胆になって将来の理想を『ささやく』ようになった。必死の思いで彼女は勇敢であろうと努めた。

あなたが将来の理想や願望を私に『ささやいて』下さるのを私は大いに喜ぶべきなのでしょうが、もしあなたが私にすぐ知ってもらいたいことがあるとすれば、私は心

を奮いたたせてそれについて考えたり、思っていることを手紙にしたためる『つもり』です。春に計画なさっていることをお話下さってとても嬉しく思います。と申しますのは私の前途はまだはっきりしませんが、最初考えていたほど可能性がないようではなさそうですし、それは以前はただ漠然としたものにしか見えなかったものに、ある種の明確さを与えてくれました。私のしていることをじっくりと時間をかけて考えるよう勧めてくれた際に、父が「お前はとても幸福な家庭を後にするのだよ」と申しましたとき、その考えは私には全く見当違いであるか、少くとも遠い先のことに思えました。それでもし彼が「お前は死ぬときに家庭を去らねばならないだろう」と言っていたのなら、それほど見当違いであるとか、遠い先のことのように見えなかったでしょう<sup>16)</sup>。

何か神秘めいたやり方で、1858年4月1日は非常に重要な日と定められた。自己の有利さを強調しながら、ウォルターはたいそう微妙なもう一つの問題を差し出した。

実際問題として家に関して何か手が打たれねばなりません。私の親類たちの現実主義は耐えがたいほどのものです。あなたに会うチャンスもなく、他におしゃべりの話題もなかったので、彼らはこの問題を取り上げ、私にいくつか提案し、困難な条件を述べました。彼らはその問題に関しては明らかに自信がないので、はっきりとした壁という囲いを見るまで、けっして自分たちの考えを具体的に表わさないでしょう<sup>17)</sup>。

エリザは自分の家族も同様に現実主義的であると打ち明けた。家捜しが開始され、今や慎しみ深い緊張感には目にみえて緩和された。ウォルターは不謹慎にも結婚式について冗談を言った。エリザは臆病そうにそれを真似た。彼の手紙は住宅に関する統計で満ちあふれていた。一方、彼女は燭台を見、塩入れの値ぶみをするために、勇敢にもあちこち出歩いた。次第に準備の大騒ぎが激しくなり、ついにウォルターから母親宛の静かな機知に富んだ手紙が出された。彼とエリザはハネムーンの途中であった。

〔原文註〕

- 1) Mrs. Barrington, p. 205.
- 2) Quoted by Mrs. Barrington, pp. 255, 29, 81.
- 3) Quoted by Mrs. Barrington, p. 457. L. H. Gree, "The Works of Walter



- Bagehot by Mrs. Barrington, *The Economic Review*, xxiv (October, 1914), 464.
- 4) Quoted by Mrs. Barrington. p. 213, 211.
- 5) Hutton, p. 29.
- 6) p. 218.
- 7) p. 31.
- 8) *Love Letters*, p. 88.
- 9) Quoted by Mrs. Barrington, p. 247.
- 10) 一連の死亡記事が1878年、個人出版された *Walter Bagehot, In Memorium* と題された小さな紙表紙の単行本の中に表われている。言及されている事柄はたいいていの場合不完全なので、私は出来る限り補足を行った。以下はその小冊子に登場している順序で記載している。日付けは全ての場合においてバジヨットの亡くなった年、1877年と同一なので省略してある。一ページしか言及されていない場合も一冊として挙げてあるので了承されたい。
- R. H. Hutton, "Walter Bagehot, " *The Fortnightly Review*, n. s. xxviii. 453-84; R. H. Hutton, "Mr. Walter Bagehot, " *The Economist* (March 31), 349-51; R. H. Hutton, *The Spectator*, 1. (March 31), 349-95, 401-3; E. D. J. Wilson, *The Examiner* (March 31); R. H. Inglis Palgrave, "Walter Bagehot, The English Economist, " *The Bankers' Magazine*, xxxi (May) 841-43; "Intellectual Detachment, " *The Contemporary Review*, xxix (May), 1151-2; Percy Greg, *The Standard* (March 27); J. G. and E. J. B., *The Inquirer* (April 7); D. A. Aird, *The Civil Service Review* (March 31); *The Echo* (March 25); *The Dundee Advertiser* (March 27); *The York Herald* (March 28); *The Pall Mall Gazette* (March); *The London Daily News* (March); *The London Daily Telegraph* (March); *The Scotsman* (March 26); *The London Times* (March 27), 9; *The Langport Herald* (March 31); George Walker, "Walter Bagehot and the Economist, " *The New York Nation*, xxiv (April 5), 204-5; J. W. G., *The New York Inquirer* April 12); *The New York Public*, xi. 243; A. P. M. "The Late Walter Bagehot, " *The Melbourne Review*, ii. 216-17; C. V., "Walter Bagehot, " *La Revue Politique et Littéraire*, xix. 953; Max Wirth, *Die Neue Freie Presse* (April 6)
- 11) "The Works of Walter Bagehot, " *The Economic Journal*, xxv (September 1915), 370.
- 12) バジヨットの求婚の記事は52ページからこの章の終りまで登場する断片的な引用と同様に *Love Letters* からのものである。
- 13) p. 45.
- 14) See pp. 146-55.
- 15) *Love Letters*, pp. 49, 56-7, 67.
- 16) *Love Letters*, pp. 99, 59, 61-2.
- 17) *Love Letters*, p. 86.